

真宗は仏教とキリスト教との 橋わたしとなりうるか

ヤン・ブアン・ヴラフト神父

みなさん、こんにちば。私たちは誠に変わった時代を生きているんじゃないかと思えます。と言うのは、この学会に際しましてこの台に立つのは本来、真宗学者ではないでしょうか。そして疑いもなく、私は真宗学者ではありません。その代わりに、私がどういう者としてここに立っているのかは先ほど神戸先生の非常に御親切な紹介をもらいましたけれども、まあやはり一つはキリスト教徒として、みなさんから言いますと他宗教の人として、おまけにこの日本では一番よく知られているキリスト教と少しその伝統が異なっているカトリックの人。そしてわりに諸宗教対話にかかわっている人。うちの南山宗文化研究所の一つの目的が諸宗教の対話を促進する所にあるということは確かです。その上に個人的に言いますと、浄土真宗と縁の深い人。私は二十年以上も前に京都大学で少し勉強した時に、真宗のお坊さんである武内義範先生のもとで勉強させていただきました。その時から私は仏教に興味をもちはじめ、そして特に真宗への興味が湧きました。まあ正直に言いますと、私は真宗の人たちと、そして特に真宗のお坊さん——自分も「坊さん」だからかもわかりませんが——一番アットホームに感じます。違和感を全然感じないということです。更に私は先程も言われた通り自分なりに少し真宗のことを勉強して、特に曾我先生のむづかしい文章

を一人の外人として非常に苦勞しながら読んでいるわけです。

そういう人が真宗学者に何を言うことができるのかということですね。皆さんに役に立つ言葉はどういうことかと私もまだよくわかりませんが、とにかく、おそらくは今日のこの会議のオーガナイザーの腹には、私はなるべくみなさんを刺激し、挑発したらいんじゃないかという感じですよ。それで私は卒直に、フランクに話をしようと思います。あらかじめ皆さんのお許しを願って、ということですよ。話したい内容はいろいろありまして、そして何を先に出した方がいいかわかりませんが、次のようなものに少し触れたらどうかと思いました。先に、もしそういうパーソナルなものから話をさせていただけば、私はどうして、どういう意味で真宗を勉強するのか。次に、諸宗教対話とはどういう意味のものか。次にキリスト教、まあ仏教との比較の上でキリスト教の特徴に触れたい。その次にカトリックとプロテスタントとの違いに関して。それは別にプロテスタント・カトリックのことを話したいわけではないけれど、ただその次の点に関わりがあるから少しそれにふれたいと思います。それから私の真宗観ですが、少しくらい勉強した上で真宗をどういう風に見ているのか、特に今日の話の題になっている「真宗は仏教とキリスト教との橋わたしになり得るのか」ということに関して、それは変な題かもしれませんがまあその中に私の真宗観がいきらかに出て来ると思います。すなわちキリスト教と仏教との関係、キリスト教と真宗との関係、そして真宗と仏教との関係に関しての私の考え方も含まれているわけです。最後に、もし時間があれば、おそらく時間はないでしょうけど、真宗と西洋との関係について、前に一遍小野先生は私に次の質問をされました。真宗は西洋ではあまり発展しない。それはどうしてでしょうか。それにも一言触れることが出来ればいいと思います。

まず、私はどうして真宗を一生懸命に勉強しているのか。それに関して一つのエピソードを思い出します。それは阿部正雄――。皆さんが御存知だろうと思いますが、前に奈良女子大の教授で、後からずっと外国で客員教授をして

いらっしゃる方ですが、この阿部正雄先生は、一九八四年一月にハワイでキリスト教の神学者と対話をなさったわけ
です。そしてその中に彼は一生懸命にキリストのケノシス (KENOSIS)。「空化」と訳される聖パウロの言葉ですが、
キリストは神でありながら、自分を全く空しくして、人間になったという意味の言葉ですけれども、キリストのケノ
シスという言葉はキリスト教では割に普通に使われるわけですが、直接に神のケノシスという言葉はあまり使わない。
しかしその場で阿部正雄先生は一生懸命に神のケノシスという考え方を強調してきました。そして彼がびっくりした
のは Hans Küng と言う有名なカトリックの神学者はそれに反して、割りにはげしく反論したことです。そしてそ
の会が終わったら先生はすぐ八木誠一先生のところへだいたい憤慨してその話をしていきました。たまたま私もその中
に入って、次の質問をしました。「先生、よくわかりませんね。私は神を信ずるものだから、神がどういふものか。
などの話になると、まあ私は顔を赤くして、それを話してもわかるけど、ただ先生は禪の方で別に神を信じるわけ
ないでしょう。それでどうしてそんなに興奮していますか」と、少し失礼な質問したんです。でその時阿部先生の返
事が非常に印象に残ったんです。「私はもちろん名前の上でキリスト者ではありません。そしてまあ神を信じないと
言われるけど、ただ私にとって神は決してよそ者ではありません」と。そういう言葉に私は非常に打たれたわけで、
今反省しましたら実に真宗のことは私にとってけっしてよそ者ではありません。真宗の宗学ですか、教義も私として
よそ者ではありません。私もある意味でそれについて何か興奮することが出来るようになったんじゃないかと思いま
す。よそ者でなくて何か自分のものとしてそれを感じるようになったとある意味で言えると思います。それは今そう
いう時代になったんじゃないかと思えます。それは昔は有り得なかっただろう。最近そういう現象が出て来るようにな
ったんじゃないかと思えます。

それでそこからすぐそういう対話、諸宗教対話とは何かということに関して一言言いたいと思います。皆さんご存
知でしょうが、キリスト教は、この日本ばかりでなくて、世界中、他の宗教と関係するところでは非常に排他的な宗

教だという評判ですね。そして確かにその通りでした。確かにキリスト教の自覚において、キリスト教だけ真理であって、他の宗教は——大昔からの考え方、それは旧約聖書からの考え方ですけれども——他の宗教は皆偶像崇拜だと。それは旧約聖書の概念でした。それで偶像崇拜はイコール悪魔の業、そういう考え方は旧約聖書に非常に強くて、そのままキリスト教のなかに伝わってきたわけです。そのキリスト教の一番古い神学者と言いましようか、まあ教父と言われますけれど、まあ仏教的には高僧とか七高僧のようなものが教父（教えの父）と言われる。その人たちはギリシャ文化と接触した時に、いつも何か区別をしていました。一方ギリシャの知恵、まあ哲学と言いましようか、それは知恵としてどうしても神からのものだ。知恵そのものは何処にあっても神からのものだとか、聖霊はその中に働いているとか、それはいつでも書いてあるわけです。ただその同じ教父たちは、他方ローマ時代の具体的な宗教現象を悪魔のものとして見てきました。それである意味で宗教と知恵を区別したそういう考え方です。しかしキリスト教は、少なくともカトリックは、第二バチカン公会議と言われるもの、それは一九六一年から六五年までの間に行なわれたもので、その時全世界の代表者、司教たちなどが集まって、いろいろ決めたわけですね。そしてその場でそういう排他的な態度を徹底的に考え直したということは確かです。すなわち今まで自分だけの中に真理があると信じてきた教会は自分以外にも、自分以外の他宗教の中にも真理があると認めたわけです。キリスト教的に言いますと、他宗教の中にも聖霊が働いているとね。そういうことを公に認めるようになったことは本当の意味で心の改心ですけどね。ある国で、例えばタイ国で、仏教徒は時々激しくカトリックと対立します。今日でも、日本では最近あまり見えないですが、それはどうしてか別問題ですけど。ただ今のタイでは、まだ時々激しいもめ合いがあります。例えば四・五年前にまた一遍キリスト教は激しく攻撃されました。すなわちカトリックには全世界を占領する計画があると言ふ、そういうことが新聞などに出たわけです。そしてその言い分の中に、現代のいわゆる対話の態度は昔と同一の排他的な心がその中に入っていて、ただそれを外面的に少しカモフラージュしたという考え方が出てきます。しかし私

に言わせればそういうことは本当になくて、本当に心の改心だと私は言いたいのです。他宗教とどうして話し合うか。まあある意味で理由なしに。それは根本的なところだと思います。「オオネワルム (OHNE WARUM)」、「ドイツ語でかの有名な言葉がありますね。何かあれと言う目的はないと言った方が根本的なところだと思います。何もねらいなし。何も直接に得るところなし。ただそれこそ今の世界ではどうしても為すべきことだという感じから。

まず宗教対話は、宗教的な動機から生まれたわけではありません。全く世俗的な世界の状況から生まれてきたと言った方がいいです。昔はそれぞれの宗教は自分の縄張りの中に閉じ籠っていたわけです。しかし今の技術改革に依って世界が小さくなって皆お互いが接触せざるを得なくなったと。そういう全く世俗的なところにやはり根本的な理由があると云わなければなりません。もう一つ、少し変な言い方かも知れませんが、諸宗教対話はもしかしたら全ての宗教の弱さの印しるしだと言ってもいいかも知れません。自分の力を非常に自覚する自信たっぷりの人はあまり他人を必要としない。あまり他人と協力しなくても自分だけで出来る。それである意味で今の世界に見えて来た諸宗教の対話は、まあ全ての宗教が迫まって来る世俗化運動に対して自分の弱さを自覚してきたという印であるかも知れません。社会学的に言いますと、そう言わざるを得ないかも知れません。しかし、それでも今まで考えてきたもの、自分の宗教だけが真理だと言うことに對して今、新しい自覚が生まれたと言うことは、大したものだと思います。即ち愛の無い真理は真理で無いと、まあ仏教的に言いますと慈悲の無い智慧は智慧でないと。すべての他の人に関して、それらが皆真理の無い、救いのないもんだと考えることはあまり慈悲深いところではありませんね。そして自分の真理はどんなに深くても、どんなに正しくてもその中に愛が含まれていないと、本当の真理ではありません。その中に仏教的に言いますと、智慧と慈悲との非常に微妙な関係になるんじゃないかと思います。まあキリスト教では、こう言われることがありますね。私たちは時の印しるしに従がって歩かなければなりません。時期、時間の印しるし。自分からだけ考えるのではなくて、時代の状況、世界の状況の中に私たちのための教訓があるという考え方です。又キリスト教的に言

いますと、その中に聖霊の導き、聖霊の誘いがある、招きがあると、それはキリスト教の一つの考え方です。この世界の出来事の中に私たちにとって教訓が含まれている。そして今の、例えば西洋にも仏教徒が割に見えてきたなどなどの新しい現象があって、どうしてもお互いに接触することになったという状況の中に何か神からの招きの導きがあると、そういうふうに考えられます。それは仏教の中にも——一応神という言葉を別にして——そう考えられるかどうかは私にはわかりませんが、それは皆さんへの質問になりますね。まあ先ほど諸宗教対話には理由が無いと言ったんですけれども、そう言ってもその中に得る所とか実りが無いとは私は言っていないません。非常にお互いにプラスになるものがそこから生まれることが出来ると、私は信じています。一つは、そういう対話のただけで得ることが出来るものと思いますが、それは自分を見る鏡、新しい目で自分を見ること、それは自分だけでは出来ない。絶対に出来ない。ただ他宗教の中に、その鏡の中に自分を見ることに於いてはじめていろいろ見えてくるわけです。自分の事がね。それは正しい自己意識ですか、そのために大切なことです。その中の一つは、例えば私の場合は仏教徒と話し合うようになってから初めてキリスト教の前程が自覚されたわけです。前程と言うことは、前程だからそれは無意識のものです。自分がわからない。何を前程にしているか。私たちが皆同じく感じる人といっしょに生活し、接触する間に皆同じ前程をもっているわけです。そしてその前程をお互いに自覚していない。しかし、キリスト教徒として仏教徒と話し合う場合はむこうから必ず期待していない質問が出て来る。そしてその質問の形から、なるほど私はこれを前程にしていたと。そういう自覚が生まれて来ます。まあ逆に仏教徒が、例えばキリスト教徒と話し合う時にはじめて仏教は宗教として何を前程としているかとわかって来ます。無前程の宗教はありません。自分の方でそれは完全に筋が通っている、前提のない体系だと思ってもそうではありません。お互いにもうそれを認め合った方がいいと思います。そういうものは、ありえない、人間として。そして将来でも宗教がそうなるはずもないと思います。しかしそういう自覚が一番大切になるのは他文化圏の中に入る時です。キリスト教が例えばこの日本に入る時に自分の前

程をなるべく自覚した方がいいです。でないと自分がしている話は相手にはわかりません。お互いに前程を別々にしているから。逆に真宗が西洋に入るとき真宗の前程は何かということを、ある程度自覚しなければなりません。そして真宗の一つの前程は、当り前のことですが、仏教の哲学といましようか、何と言いましようか、世界観と言いましようか、物の感じ方、物の考え方なのです。そしてそれは確かに西洋の人たちのそれと割にちがいます。そういう場合にただ伝統的な、日本で伝統的な話だけをしたらもう向うの人がわかるはずはありません。逆にここでキリスト教の伝統的な話だけをしたら日本人はピンとこないことになるわけです。それは確かに仏教とキリスト教との対話の一つの長所ですが、一つの実りに成り得るものではないかと思えます。

まあこの話はこれだけにして置いて、次にキリスト教の話を少しだけしようかと思えます。なるべく仏教と比較して。まあ後からその理由がわかると思いますが、皆さんのお許しを願って、私が昔二十一年前に書いた文章を少し読まさせていただきます。それはまだ京都大学で勉強していて、私の仏教との接触がまだ非常に浅い時でしたけれども、その時に、私は、『ジャパニーズ・レリジョンズ』という雑誌に（皆さん御存知か、それは、NCC宗教研究所の雑誌ですが）西谷先生の『宗教とは何か』の本の書評を出しました。まあ25ページくらいの長い書評ですけれども。その中に私は、次のような文章を書いたのです。英語で書かれたものですが、「私の受けた印象では、仏教の多少哲学的な教学と信徒、一般信徒の生きている仏教とはお互いに割に離れているんじゃないかと」。私の当時の印象ですよ。「一方宗学者の、現世利益をたのむ祈りがすべて執着で、いけないという話を聞いて、他方信心深い仏教徒のお母さんが一心になって、例えば地藏様に向かって病気の子供の回復を祈る姿を見る時に、私はどうしても本当の仏教というものは何といってもその母の方にあると考えがちだ」とその時に書きました。あそこに一つのキリスト教と仏教との間の深い違いがあると私は感じました。私はもうその時から問題をいろいろな方向から自分なりに考えてきました

けれども、今、直接にじやなくて間接にそれに関連して少し話そうと思います。例えば、それも一つ私の印象でしたけれども、現世利益の祈りという言葉は仏教の中に割に大きな役割りをしているということと違って、キリスト教の中ではそんなに問題になっていないということです。それはどうしてか。その中に何か非常に微妙な違いがあると思います。

一言で言いますと、私の感じでは仏教特に大乘仏教はよく天辺の話をします。山の天辺。宗教はもし山なら仏教はよくその天辺の話をします。天辺。純粹なところ。その代わりに、もっと下、山のふもとの話はあまりしないような感じです。それは本物ではないかのように。キリスト教はもう少し下からはじまる感じです。一番下から。普通の人間の欲望から。それで普通の現世利益から始まるというような感じです。もちろんそれは、キリスト教はそういう下のことを皆そのまま肯定する意味ではありません。ある意味で肯定しますけれど、しかしそれは一番高いことじゃないとよく判かった上で、それで宗教というものは人々を自分がいるところ、そういう一番下のところからぼちぼちその山の天辺へ導こうとする様な努力だと。そういう様な感じはします。私は。それでキリスト教の祈りというものになりますと、例えばキリストがご自分で教えてくれた祈りの中に――主の祈りと言われるものの中に――、両方入っています。一番理想的なこと、全く無我の祈り。神の国を願う祈り。その中に私自身が完全にいなくなる、ある意味で。それは自分のことでなくて、それは神のことだけ願うものなのです。ただその同じ祈りの中に日常のパンを願うわけです。それをキリストは矛盾として感じなかった様ですね。その二つが一応両立出来ると。もちろん自分が入っている祈り、我がまだ入っている祈りはだんだん純粹化されなければならぬ、それは確かですけれど。しかしキリストご自身の例を見ますとそれは完全に純化されるはずはないとも言えるんです。キリストがその受難の前夜、神に向かって祈った。「この苦しみを私から取り除いてちょうだい」と祈った。私たちキリスト教徒に言わせれば完全なキリストがそう祈った。それはある意味で現世利益を願ったんじゃないかと思えますけれども、実にすぐ、「た

だ私の望んだ通りでなくて、あなたの御胸みむねのまま」と付け加えたけれども。ただ先にそれを頼んだわけです。そういう何か非常に微妙な違いがあるんじゃないかと、私の感じですね。そういう違いの中にいつでも何かお互いに反省する点がありますね。そういう一つのことを指摘したかったんです。まあいろんな実例を挙げることが出来るでしょうけれども、あまり時間がないからそれを飛ばしましょう。おそらくは、その土台になる、背景になるものとしての一つのことがあると思います。

先程、小野先生は、真宗は救済の教えばかりじゃなくて自覚ですか、自証の教えですとおっしゃいました。根本的に私は賛成ですけれども……。ただ今度キリスト教に関しても、それはただの救済の話じゃないと言えるんです。それは少しくらい小野先生の意味でも言えると思いますけれども、まあそれを別にして、もう一つの意味があります。キリスト教は救済の話である以前、創造の話だと。神がこの世をお造りになったという話です。そして私と神とのつながりはまず第一その救済の中じゃなくて、神の被造物として私は一番さきに神とつながっているという点には、大きなウエイトがあると言わざるを得ない。それはキリスト教として非常に大切なことです。そして前のことと結びつけたら、微妙なことですが、この世のものはすべて神の被造物、神に造られたもの。私の欲望も神に造られたもの、パンも神に造られたもの、他人も神に造られたものなのです。そして神に造られたものとしてみな本当の實在だと。私の心よりも本当の實在だと。私は勝手にその實在を変え、私の心では勝手にその實在を変えることが出来ない。それはまずこの實在を尊敬しなければなりません。神の被造物として。それが一番根本的なことです。そしてもち論人生はキリスト教によりますと、ただ神によって造られたものばかりでなくて、何か人間は自分の罪で作ったものもあると。まあ罪もある。とにかく人生のすべては同じように大切であるんじゃないかと、やっぱり最後に神に対する純粋な愛が大切であると。たしかにそうですけど、最勝のその愛はすべてのものから生まれてこなければならぬ。下から生まれなければならないと言うことに重点があるとある意味で言えるんじゃないかと思えます。そ

ういうキリスト教の特徴といいたしうか、どうしてもお互いに理解したい場合はそういうものもよく見なければならぬと思います。でないと同じ言葉を使いながら別々のものを語るようになってしまつて、本当の対話になりません。

次にカトリックとプロテスタントについて一言言いたいと思います。私がよくその違いを次のように言いますが、それは大雑把で図式的な話ですから、そのままに受け取ってはならないけれど、キリスト教の中に大きく分けますと、プロテスタントとカトリックがあつて、その二つの違いは何ですかと。私に言わせればその一方プロテスタントは純粋なものを狙っているキリスト教。純粋なキリスト教を狙っているもの。ある意味でイデオリズムですね。もし一方でその純粋さですか、それとも純化という言葉でプロテスタントを特徴づけることが出来れば、他方カトリックは包括性、いろんなものを自分のふろしきに入れる傾向、ふろしき主義と言つてもいいかも知れませんが、いろんなものを自分の中に割に大胆に受けとるといふ傾向は、まあ比較的です、カトリックの特徴と言へると思います。キリスト教の中にその二つの特徴があると。もう一度言いますが、図式的な話ですね。全部にあてはめることは出来ないけれども、ただまあだいたい傾向としてそう言えるのではないかと思います。

そしてそういう包括性の意味に関して一言言いたいです。もちろん、一方から見ますと、純粋な教えの他に自分の宗教にはいろんなものを受け取つたらだめだと考えることが出来ます。確かに。自分の純粋さを曲げてしまつたりする可能性そして危険性が十分あるから。それは一般に言えるし、そしてカトリックの中でもそれを強調する人もいます。ただ一般的な傾向として人間的なものを皆受け取つてもいいというような傾向はカトリックの歴史の中に一番強い傾向だったんじゃないかと思ひます。それでその意味を少し説明するつもりで、もち論皆さんよく御存知と思ひますけど、二つの点にふれたいと思ひます。一つは宗教学では宗教はよく原始宗教といいたしうか民族宗教といいた

しょうか、そして歴史宗教。その二つに大別されるでしょう。仏教もキリスト教ともに歴史宗教と言われます。そして歴史宗教は歴史のある時期に出来たものです。民族宗教はそうじゃなくてそれはもう無始のものと云わなければなりません。そう言いますと歴史宗教はどうしても私に言わせれば二次的で、二番目にくるものです。歴史的な宗教が出来るときに、もうそこに民族宗教があつて、そしてある意味でその民族宗教から歴史的な宗教が生まれるわけです。もちろんそれは多少民族宗教を否定しながら、そこから生まれてくるんですけれども、それでもそこから生まれてくるから、必らずその土が付いていると私が言いたいのです。それでその歴史的宗教の創始者の純粹なアイデアだけで宗教が成立出来ない。どうしてももっと深い土に根をおろしていかないと何にもならない。生存出来ない、宗教史を見てもみずと、私はどうしてもそう考えざるを得なく、それで純粹な、全く純粹な歴史的宗教は生存出来ないと思ひます。その創立者の言葉通りだけでいきますともう宗教は生存しないと感じます。実際にもちろんそういう宗教はありません。全ての宗教は自分の創立者の純粹な教えの他にいろんな要素を入れてきました。実際に、真宗もそうですし、カトリックも確かにそうですし、割に大胆にそれをわざとやってきいたと言つてもいいです。そしてプロテスタントも、どんなに建て前としてそれに反対しても、実際に多少民族宗教的なところを取り入れてきました。それが一つ。

もう一つは、宗教には二つの役割があると思ひます。もちろん別の分析も可能ですが。一つは人に安心あんしんを与える。ある意味でふるさとを与えるということですね。この冷たい宇宙の中に人間に何か生活を可能にさせる考え方とか、何か支えになるものを与えるのです。そしてもう一つは人を上にあげるといふ役割、向上という言葉で言つてもいいかも知れません。民族宗教はほとんど前の方だと思ひます。安心を与える方で、ほとんど向上を含まない。例えば神道のようなものは本當にふるさとを与えるような宗教ですね。向上はほとんど入つてこないのではないでしょう。うか。それに反して歴史的宗教はたいにいふるふるさととはこの世のものじゃなくて、それはよそ、ふるさととはよそだと

言うんですけど、それで人の向上を非常に強調すると言ってもいいです。それらの方法論はまた様々ですが、たとえば自力か他力かなど。しかしそれを別にして、どうしてもやっぱり人々を今の苦のレベルから、それとも罪のレベルから別のより望ましい、より高いレベルへ移す、移したいという一種の救済の考え方があって、それを向上と考えてもいいでしょう。そしてただその点だけ強調して、人の安心を全く無視する宗教は少しまずい宗教だと私は思います。たぶん一般信者の多くは向上よりも人生の安心を探しているかも知れません。それは彼らの権利だと思います。その中から向上への道を開くことが出来ればそれは一番望ましいかも知れませんが、とにかくその安心への要求を認めざるを得ないし、本当の宗教がそれをも自分の一つの目的としなければならぬと思います。上の二点をもちろん合わせて考えて行かなければなりません、今はそのひまはないから、それを皆様の思索に任せたいと思います。とにかく、この二点を十分に計算に入れますと、宗教には包括性の余裕ができると同時に、人々が実際に居るところから出発して彼らを少しでも無我へ、神へ向上させるようなものに成り得るのではないかと思います。

もうほとんど時間がありませんけれども、どうしても一言私の真宗観について話したいと思います。皆さんを刺激するつもりで。確かに外国の本の中に、まあ真宗に関する、ドイツ語とかフランス語とか英語の本があまりありませんけれども、今まで出た本の中に真宗は殆ど一般仏教に還元される傾向が強いと私は見えています。殆ど真宗の特徴ですか、独自性を取り除いていますね。それは表面だけだと。深く見れば皆仏教そのもの、一般仏教、聖道門と言いましようか、と少しも違います。西洋の学問的な本の中にその傾向が強いのです。そしてそれは部分的に鈴木大拙の真宗解釈に基づいています。西洋では鈴木大拙の影響は非常に強い。そしてそれは禅の紹介に於いてばかりではなくて彼は真宗についても英語で書きましたから、彼の見方は大きなウェイトをもっています。けれども、私はそれを非常に残念だと思います。私はもう少し真宗の独自性を強調してもらいたいし、自分ももう少しそれを強調したい。ただそれは非常に微妙なことです。それは今の「真宗は仏教とキリスト教との橋わたしになりうるか」と深く関連します

が、橋渡^{わたり}たしになるのは、ある意味でその二つの間に立っているものです。皆さんはある意味でこの自分の真宗を仏教とキリスト教との間に立っているものとして認めることが出来るかどうか、それは今の質問になります。私はある意味でそう見ています。言い換ええますと——それは私の中心的な言い分になりますけれども、十二月にもそれを少し話をしたのですけれども、今それをもう一遍繰り返しますと——一九世紀にキリスト教が日本にもう一遍入ってきた時に仏教界にはだいたい不安をもちました。その歴史を読みますとキリスト教が当時の西洋文化の波にのっとなって入ってきたので、仏教はどうなるかという心配を起こしても無理ではなかったかも知れません。そして同時にヨーロッパの仏教も入って来ましたが、十九世紀のヨーロッパの仏教学者のほとんどは専ら言わば小乗を勉強してきました。パーリー語の三蔵のこと。それでその結果非常に倫理的な仏教を西洋に紹介しました。そしてそういう立場から真宗は、まあ浄土教はそれは仏教ではない、それはむしろキリスト教のようなものだと言ってしまったわけです。それは直接にキリスト教の影響を受けたかどうかは別問題ですが、とにかく仏教よりキリスト教に似ているという主張でした。とにかく明治以来今日に至って、真宗の文献に於いて、「我々は仏教の主流に属して、キリスト教と全く違う」というテーマが非常に強調されてきたと思います。そして私も確かに真宗は根本的に仏教だと強調したいのです。それは確かにそうですね。そして真宗の一番純粹なところ、一番きれいなところのほとんどが仏教の伝統に由来するでしょう。例えば、先ほど小野先生が仰ったこと、救済というものは自分の幸福ばかりではなく本当の智慧を探し、求めることだと。それは確かに仏教の伝統からの発言です。しかし他方、今言葉使いが大切に少し微妙ですけれども、真宗は単に、大抵仏教の本質と言われるものに還元出来ないし、真宗を仏教の本流とも言えない。まあこの場合仏教の本流と考えられるのは、むしろ大乘の聖道門とか、やっぱり「空」の哲学にその中心をもっているような仏教だいたいといふ仏教学の中で言われるし、そして真宗の本を読んだらやっぱり真宗の方もそう考えているようです。仏教の本流という言葉を使うことが出来ればその辺に仏教の本流があつて、そして真宗は決してそればかりでないと、私は

強調したいのです。それでそこからもう一步進んでみますと、真宗は自分の中に——仏教の本流といひましょうか、まあ一応その言葉を使いますね——仏教の本流との緊張関係を含んでいて、その本流からあまりにも離れていくと、民間信仰に落ちがちですけど、かえってその本流にあまりにも密接にくっつくとうすると自分の独自のなところを展させ得なくなるし、同時に一般庶民から離れていくと。それは私の考え方です。もし一応、真宗の中にそういう二重性を認めることが出来れば、一方いわゆる大乘仏教の本流、他方自分の独自のなところ。その独自性を指すのにどういう言葉を使ったらいいかわかりませんが、確かに非常に深い宗教性、まあね、言葉は足りないけど、独自のな宗教性という言葉にしてもいいかも知れません。禅の宗教性と真宗の宗教性は非常に違うと思いますね。根本的に言うと。哲学になりますと多分真宗も同じような哲学に還元出来るかも知れませんが。ただ哲学は宗教ではありません。宗教には人の心の動き方は大きな役割をしています。そして信徒の心の動きになりますとやはり真宗信徒の宗教性は、例えば禅の坊さんのそれと非常に違うと言わざるを得ないでしょう。そして逆に、真宗のそういう宗教性の中にキリスト教との共通点が多いと私は見えています。一般のキリスト教の信者と一般の真宗の信徒は、いろんな面でお互いにすぐわかると思います。同じような宗教性が働いているから。それは確かだと私は思います。そしてそれを無視したら、まあ例えば今の西洋では真宗を紹介する本のように、いけないと思います。やはり別の紹介が必要になったと私は思います。そして他方、相変らず真宗のアイデンティティーは確かに仏教の中にありながら、同時にまあキリスト教と似ている宗教性を含んでいるから、この両方の間に初めから何か緊張感が存在していると私は思います。そしてその二つを両立させるような考え方は簡単ではない。そこに真宗の宗学の努力があったんじゃないかと思っています。例えば親鸞聖人御自身でも。先ほど小野先生は救済と自証、正覚との関係をどう見たらいいかという問題をあげましたが、そういうお話の中にはもう真宗学の永い努力の実りが含まれています。そしてもし例えば仏教そのものの、大乘そのものは自証で、他方キリスト教は救済なら、ある意味で真宗の中にその二つがもう一緒になっていると

私は見えています。真宗はその二つの関係をもう七百年の間に見てきました。そしてこれから仏教とキリスト教が話し合うことになって、今までの真宗の仕事は非常に役に立つはずだというふうに私が考えています。そういう真宗学のえらい努力が非常に役に立つとしたら、そういう意味でも真宗がキリスト教と仏教との橋渡しになり得るんじゃないかと思います。

時間を少しオーバーしまして申し訳ございませんが、これをもちましてこの話を終わらさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございます。

（本稿は、昭和六十二年十月二十八日の真宗学会大会に於ける講演の筆録である。文責編集部）